基幹病院としての在り方に関する調査・研究

一般臨床歯科医師が九州歯科大学附属病院に求めるもの

中 村 修 一¹・河 野 博 之²・松 延 彰 友²
久保田 浩 三¹・庄 野 庸 雄¹・富 永 和 宏¹
牧 憲 司¹・椎 葉 俊 司¹・小 野 堅 太 郎¹
岡 部 幸 子¹・森 本 泰 宏¹

¹九州歯科大学泉友会

²九州歯科大学同窓会

平成 16 年 6 月 20 日受付

平成 16 年 7 月 21 日受理

Significance and Problems of Kyushu Dental College Hospital as the Key Hospital among Neighborhood Dental Offices

Shuichi Nakamura¹, Hiroyuki Kawano², Akitomo Matsunobu²,
Kouzou Kubota¹, Yasuo Shouno¹, Kazuhiro Tominaga¹,
Kenshi Maki¹, Shunji Shiiba¹, Kentarou Ono¹,
Sachiko Okabe¹ and Yasuhiro Morimoto¹

¹Senyuukai,

²Dousoukai,

Kyushu Dental College, Kitakyushu, Japan

The aim of this study was to elucidate the significance and problems of Kyushu Dental College Hospital as a key hospital for neighborhood dental offices. We sent out questionnaires to 322 dentists in neighboring dental offices. Within 2 weeks, we received the questionnaires by mail, and analyzed them.

A total of 128 questionnaires were returned (response rate, 40 %). Of the respondents, 89 % had attended dental-related lectures within the previous year. A total of 95 % of respondents had at least one patient a year for whom they could not carry out the care alone. The majority of these patients received care related to oral surgery, and 67 % of these patients were transported to Kyushu Dental College Hospital. The major reason for choosing Kyushu Dental College Hospital was that the dentists working there had good skills and also had personal communication with the referring dentists.

Systematic improvement and skill preparedness in all departments, and in particular, oral surgery, and establishment of personal communication between our hospital's dentists and dentists in neighborhood dental offices should lead to success for our hospital and for neighborhood dental offices.

Key words: Key hospital/Neighborhood/Dental offices/Significance

緒 言

九州歯科大学ならびに附属病院のあり方は地域住民や近隣医療機関の医療従事者のニーズを満たすものでなければならず、それらは臨床教育や研究の充実及び病院経営の安定化に繋がる¹⁻³⁾。特に、大学附属病院は地域住民ならびに各医療機関との直接的な接点であるため、その在り方は地域住民の大学像を左右するといっても過言ではない⁴⁾。つまり、今後の大学存亡を占う意味でも、大学は附属病院と地域住民との関係が特に重要な要因であることを認識し、その充実を図る必要がある⁴⁾。そのためには、まず大学が地域住民及び近隣医療機関の九州歯科大学附属病院に対する認識度ならびにニーズを把握する必要があるが、現在までそのような調査は、行われていない。

検討すべき内容は、大きく二つに分けられる。一つ目は近隣医療機関と本学附属病院との関わり方に関するもの、二つ目は地域住民に対する附属病院の在り方に関するものである。九州歯科大学同窓会及び泉友会は、はじめの取り掛りとして一点目に挙げた近隣医療機関と本学附属病院との関わり方に関する調査を行った。すなわち、近隣施設の医療従事者が本学附属病院に抱く希望や問題点を把握することを目的に、北九州市及びその近郊の歯科医院に対し郵送法によるアンケート調査を行った。

研究対象ならびに方法

近隣医療施設に配付したアンケート用紙を図1に示す。アンケート内容は、19項目とした。調査対象は近隣医療施設の歯科医師322人で九州歯科大学同窓生から無作為抽出した。対象地域は、患者が来院可能な範囲とした。歯科医院に関する内訳を表1に示す。アンケート調査の流れとしては、アンケート調査書を平成16年1月29日に送付し、〆切りを2週間後の平成16年2月14日に設定した。その後2週間待ち、返事の無かった医院は棄権とみなした。返信されたアンケート用紙に基づきその内容について検討を行った。

調査結果

A. 調査対象について

1. アンケートの対象について

322通のアンケートのうち、回収総数は128通であり、回収率は39.8%であった。地域別の回収状況を表1に、アンケート回答者の卒後の臨床経験を表2に、歯科医院

◆質問者のIDに関して

1. 貴院の所在地をお教え下さい(市、区、郡までで結構です)。
2. 先生の卒後の臨床経験年数をお聞かせ下さい。
3. 貴院の規模をお聞かせ下さい(歯科医師数、常勤、非常勤)。
4. 貴院の標榜専門科をお知らせ下さい(複数回答可)。
1) 一般歯科 2) 小児歯科 3) 矯正歯科 4) 歯科口腔外科

◆学術研修について

5. 最近1年間に歯科臨床に関する学術講演会や講習会に参加されましたか?
6. どのような領域の講演会・講習会でしたか(複数回答可)。
7. それらの内、九州歯科大学の職員が行った講習会等は何回ありましたか?
8. 学術的貢献に関して九州歯科大学に希望される点がございましたらお聞かせ下さい。

◆九州歯科大学附属病院について

9. 九州歯科大学の診療時間は現在別紙のようになっております。このことをご存知でしょうか?
10. 診療時間についてこのままでいいかどうかお伺いします。
1) 現在のままでよい。
2) 延長してほしい。
3) 時間外患者を随時受け入れてくれれば現状のままでよい
4) その他(具体的にお書き下さい)。
11. 「延長してほしい」とお答えの方にお伺いします。どの時間を延長してほしいですか?
1) 上記の理由をお聞かせ下さい。
12. 九州歯科大学附属病院に備え付けられており、外部からも利用可能な下記の診療科や設備、検査のうち、ご存知のものに丸をつけてください
1) CT(インプラント埋入部位についての検索など)
2) MRI(顎関節円板の異常についての検索など)
3) 諸検査 味覚検査、金属アレルギー検査、唾液分泌機能検査、顎運動検査、内科、外科
13. 九州歯科大学附属病院の診療システム全般についてご意見がございましたらお聞かせ下さい。

◆歯科難症例について

14. 最近1年間の内に貴院で対応が困難なような難症例がありましたか?
15. 上の質問で「1. あり」とお答えの方にお伺いします。どのような症例でしょうか? 1症例でもあったものをできるだけ挙げて下さい。
16. 難症例はどこに治療を依頼されていますか(複数回答可)。
17. その医療機関を選択されている理由をお聞かせ下さい(複数回答可)。
18. 難症例の対応に関して九州歯科大学附属病院に希望される点がございましたらお聞かせ下さい。

◆研修登録医

19. 九州歯科大学では研修登録医として登録していただければ(無料)、貴院の患者様を先生がお連れになって当院の専門医とともに高度な歯科治療を一緒にしていただけるというシステムを持っております。このようなシステムをご存知ですか?

図1 アンケート用紙。

表1 調査対象地域と回収率

対象地域	送付数	回答数	回収率 (%)
下関市, 豊浦郡	18	0	0.0
北九州市	186	80	43.0
遠賀郡, 中間市	18	8	44.4
京都郡, 行橋市	17	10	58.8
豊前市, 築上郡	12	4	33.3
田川市, 田川郡	13	5	38.5
飯塚市, 嘉穂郡	18	7	38.9
直方市, 鞍手郡	16	6	37.5
宗像市, 宗像郡	12	3	25.0
中津市, 宇佐市	12	5	41.7
合 計	322	128	39.8

表2 卒後の臨床経験年数

臨床経験年数	人 数
5年以下	1
6年 ～ 10年	9
11年 ～ 15年	23
16年 ～ 20年	20
21年 ～ 25年	24
26年 ～ 30年	22
31年 ～ 35年	16
36年 ～ 40年	10
41年 ～ 45年	1
未 記 入	2
合 計	128

の規模を表3に示す。回収されたアンケートは送付した対象地域数に比例していた。卒後の臨床経験年数に関してどの層からもほぼ均一な回答を得ていた。また、歯科医院の規模は圧倒的に常勤歯科医師1名のところが多かった。

2. 標榜科について

アンケートに応じて頂いた歯科医院が標榜している診療科は、「一般歯科」が最も多く、続いて小児歯科、矯正歯科、歯科口腔外科の順であった(表4)。

表3 歯科医院の規模

歯科医院の規模		該当数
常勤数	非常勤数	
0	0	1
1	0	82
1	1	11
1	2	2
2	0	20
2	1	5
2	2	1
3	0	1
3	1	2
4	0	1
4	1	1
5	1	1

表4 歯科医院の標榜名

標 榜 科 名	回 答 数
一般歯科	120
小児歯科	35
矯正歯科	24
歯科口腔外科	22
未記入	1
合 計	202

表5 1年間の研修会への参加の有無

出席状況	人 数 (%)
参 加	114 (89.1)
不 参 加	14 (10.9)
合 計	128

(): %

B. 学術的貢献について

1. 学術講演会への参加状況について

アンケート回答者が一年内に歯科臨床に関する研修会に参加したか否かに関しては、参加した方が89%であった(表5)。

表6 参加した研修会の内容

研 修 内 容	人 数
歯周治療	74
歯科補綴	55
訪問診療	32
口腔インプラント	32
病院経営	24
審美歯科	23
歯内療法	22
顎関節症	21
歯科矯正	16
口腔衛生指導	14

表7 本学講師の講演への出席回数

回 数	人 数
0	52 (46.0)
1	39 (34.0)
2	16 (14.0)
3	2 (1.7)
4	1 (0.9)
10	2 (1.7)
不 明	2 (1.7)

(): %

2. 研修の内容について

研修会の内訳を表6に示す。歯周治療に関するものが最も多く、補綴、訪問診療（有病高齢者管理を含む）、口腔インプラント、医院経営、審美、歯内療法、顎関節症、歯科矯正、口腔衛生指導（寝たきり患者の指導などを含む）の順であった。

3. 九州歯科大学教員の学術的貢献

それらの研修会の中で九州歯科大学教員が講師を務めた回数を表7に示す。九州歯科大学教員が講師をしたのは、全体の約半分であった。1年間で2回以上、九州歯科大学教員の研修会に出席したとの回答が18.3%にみられ、中には10回という回答もみられた。

具体的な要望として、記載頂いた主な内容を以下に示す。

1) 失敗例を集めた講習会や長期的な臨床データに基づいたエビデンスを発表して欲しい。

2) 可能な学術講演を積極的に宣伝し、系統的で持続的な研修会を開催して欲しい。

3) 都市部に集中しがちなので、地方にも出向いて欲しい。

4) 簡単なものでよいから回数を増やし、地元オープンな会を開いて欲しい。

5) 最先端の歯科医療を積極的に紹介して欲しい。

6) 国内外に高い評価を受けている研究、臨床が多くないと思う。

7) 九歯大の教員が書いた書籍が少ないと思う。

8) 積極的に研究・教育・臨床に活動して欲しい。

C. 臨床的貢献について

1. 診療時間について

九州歯科大学附属病院の診療時間は図2に示すように128名中92名(72%)に認知されていた。現行に対する要望としては、時間外の受入れを可能にしてほしい、診療時間を延長して欲しい、という意見が多数見られた(図3)。時間延長に対する具体的な希望は、土日診療が19名(36%)で、土日診療と平日の診療時間延長が18名(33%)、平日の診療時間延長が13名(24%)であった(図4)。

2. 附属病院の内容認知度について

九州歯科大学附属病院の診療科、設備、検査の認知度

図2 九州歯科大学附属病院における診療時間の認知度。

図3 九州歯科大学附属病院における診療時間への要望.

図4 時間延長希望者 (54人) からの具体的意見.

について表8に示す。X線CT, MRI装置の認知度は非常に高いものの、金属アレルギー検査、顎運動検査、味覚検査、唾液分泌機能検査などは低かった。

3. 難症例に対する対応について

1年間に自院で対応困難な症例に遭遇した方は、128名中121名で、ほとんどの歯科医院にそのような症例が存在することが明らかとなった(図5)。対応困難な難症

表8 外部からも利用可能な九州歯科大学附属病院の診療科、設備、検査の認知度(認知率は回答者128人に対する割合)

認知内容	回答数
CT (インプラント埋入部位についての検査など)	91 (71.1)
MRI (顎関節円板の異常についての検索など)	77 (60.2)
内科	51 (39.8)
外科	48 (37.5)
金属アレルギー検査	33 (25.8)
顎運動検査	30 (23.4)
味覚検査	23 (18.0)
唾液分泌機能検査	16 (12.5)
未記入	18 (14.1)

(): %

図5 1年間に対応困難な症例に遭遇した歯科医師数.

例を疾患別にみると口腔外科の疾患が最も多く、顎関節症、歯科矯正治療、神経性疾患、口腔インプラント、有病高齢者の順であった(表9)。対応困難な症例を紹介する医療機関としては九州歯科大学附属病院が67%と最も多かったが、総合病院歯科口腔外科や医科大学附属病院口腔外科もそれぞれ14%、10%を占めていた(図

表9 対応困難な難症例の内容

難症例の種類	回答数
口腔外科の疾患	90
顎関節症	28
歯科矯正治療	23
神経性疾患	18
口腔インプラント	15
有病高齢者	13
保存的処置（歯内療法など）	9
歯周病	7
金属アレルギー	6
口臭、口腔乾燥症	6
画像診断	5
小児歯科	5
障害者歯科	4
補綴処置	2
味覚障害	2
所属科不明	1

図6 対応困難な難症例を紹介する医療機関。

6). 難症例を紹介する医療機関の選択理由はほとんどの回答者が、“技術への信頼”と“先生と知り合い”という理由を挙げていたが、“病院が近い”、“適切な経過報告”、“充実した設備”などを挙げる方も多かった(表10)。

4. 研修登録医制度について

対応困難な難症例と関連して、九州歯科大学附属病院が有する研修登録医制度を知っていると回答した方は半数しかいなかった(表11)。しかし、研修登録医制度を“利用したい”あるいは“興味ある”と回答した方は109名であった(表12)。

D. 九州歯科大学附属病院に対する全般的な意見や要望について

九州歯科大学附属病院に対する全般的な意見を回答解析すると、“システム”、“技術”、“コミュニケーション”の3つに分類可能であった。図7にその割合を示す。

表10 紹介する医療機関選択の理由

選 択 理 由	回 答 数
技術への信頼	163
先生と知り合い	144
病院が近い	95
適切な経過報告	85
充実した設備	80
患者への速やかな対応	51
患者への丁寧な対応	41

表11 研修登録医制度への認知度

研修登録医制度について	回 答 数
知っている	64 (50)
知らない	64 (50)
合 計	128

(): %

表12 研修登録医制度への興味

研修登録医制度	人 数
利用したい	31
興味ある	78
興味ない	19
合 計	128

図7 九州歯科大学附属病院に対する意見や要望の回答結果。

各々に対する具体的内容を記載すると、システムについては、1) 新患受付時間の拡大, 2) 診療時間の延長, 3) 待ち時間の改善, 4) 病診連携システムの構築, 5) 診療科間の障壁をなくすこと, 6) 患者対応に対する改善, などが挙げられている。技術に関する意見としては、1) インプラント難症例への対応など高度な技術を持つ術者を増やして欲しい, 2) 遠方患者への配慮, 3) 有病高齢者及び精神的歯科疾患への対応が挙げられた。コミュニケーションに関する意見としては、1) 紹介後の経過報告の徹底, 2) 強固な病診連携システムの構築, 3) 大学での治療終了後、患者を戻して欲しい, が挙げられていた。

考 察

我々が今回、アンケート調査の協力を要請した歯科医師は、回収率の向上を期待して、九州歯科大学同窓生に限定した。しかしながら、それでも回収率は40%程度であった。この回収率をどのように判定するかは迷うところであるが、積極的に回答に協力頂いた方は九州歯科大学附属病院に期待や不満を持つことが推測される。すなわち、我々の求めている生の声と言えるだろう。今回の集計対象は、歯科医師が常勤1名、標榜も「一般歯科」がほとんどで、臨床経験は10年以下及び36年以上を除けばほぼ均等に分布していた。従って、今回の結果は一般的な歯科医院からの意見を強く反映した九州歯科大学附属病院の外部評価とも考えられる。

今回のアンケート調査から、九州歯科大学出身の標準

的な開業歯科医師は、1年間に最低1度は学術講演（講習）会に出席していることが把握出来た。その頻度は年齢間で大きな変化はないものの、卒後年数が15年程度の先生が多数回出席していることも分かった。更に、参加された講演会の内容は歯周治療関係、歯科補綴関係、有病高齢者歯科関係、歯科用インプラント関係と日常臨床に直結したものが上位を占めていた。その中で、九州歯科大学教員が講師を務めた研修会は全体の半数であったが、2回以上九州歯科大学教員の研修会に出席した方が20%弱存在し、中には10回と定期的な研修を行っている例も見られ、九州歯科大学の学術的貢献としてはある程度の努力がなされているものとも考えられる。しかし、この数字は今後更に上げて行く必要があることは事実で、回答結果から得られた開業歯科医師が興味を持つテーマを考慮した上で、大学側が積極的にアプローチして行く必要があると思われた。九州歯科大学への学術的貢献に対する希望及び意見をまとめると、積極的な講習会の開催を期待する声と一方で九州歯科大学教官の学術的能力のアップを要求する厳しい意見が多かったことも事実である。九州歯科大学にも、世界的に評価を受けている臨床活動や研究は数多く存在していると思われる。しかしながら、それらの宣伝が不徹底であるため周囲の方に理解を得られていない実状が浮彫りにされた結果であろうと推測する。今後はより積極的に広報活動にも力を注ぐ必要がある。

九州歯科大学附属病院が基幹病院として機能するためには、地域の歯科医院から患者を紹介しやすい病院を作ることが必須である¹⁻⁸⁾。九州歯科大学附属病院の診療時間は調査対象の多くが、現行の診療時間を知っていると答えており、九州歯科大学附属病院が地域の基幹病院として必要とされていることを示す一つの指標であると考えられる。一方で、診療時間に対する意見として、診療時間の延長を求める意見が多くを占めていたことも事実であった。延長の内容としては、土日診療を上げる声が多くを占めていた。この点に関しては、解決しなければならぬ多くの問題も含まれているため、直ちに対応することは困難かと思われるが、前向きな検討が必要である。しかし、“平日の延長”，少なくとも“新患受付時間の延長”は地域歯科医院のニーズに応えるためにも早期の実現が望まれる。

九州歯科大学附属病院が保有しており外部からも利用可能な設備や検査の一部の認知度がかなり低いことも確認された。X線CT、MRI装置は現在の附属病院開設時に広範囲にわたり広報活動が行われたこともあって認知

度は極めて高かった。一方で、今回のアンケートに選択項目として加えた金属アレルギー検査、顎運動検査、味覚検査、唾液分泌機能検査といった日常臨床に大に関係するものについての認知度がかなり低かったため、今後積極的な広報活動を行う必要がある。

九州歯科大学附属病院が今後さらに地域の中核基幹病院として機能して行くためには、地域歯科医院で対応困難な難症例を円滑に受け入れることが極めて重要である⁹⁻¹³⁾。そのため、対応困難な難症例を紹介する医療機関を調査したところ、九州歯科大学附属病院が圧倒的多数を占めた。勿論、九州歯科大学出身者へのアンケート調査であるためバイアスの存在は否めないが、九州歯科大学附属病院の地域機関病院としての役割を示す一つの指標とも考えられる。また、今回のアンケートでは難症例の内容についても調べたが、疾患別に分類すると抜歯を中心とした口腔外科的疾患に偏っていた。他には、顎関節疾患、歯科矯正、神経性疾患、口腔インプラント、有病高齢者といったものが多数を占めていた。そのため、九州歯科大学附属病院が基幹病院としての機能を発揮するためには、上記疾患を担当する診療科を充実させることが重要な課題であると言える。特に、歯科口腔外科領域は上記のほとんどの疾患や病態とも深く関わっており、患者の紹介を受ける基幹病院の機能的な中枢を成すものと思われた。更に、有病高齢者への対応も極めて重要で、九州歯科大学は丸となって同診療科の立ち上げにも積極的支援を行っていくべきであろう。

紹介する医療機関を選択する理由としては、“技術への信頼”と“先生と知り合い”であることが極めて多く挙げられていた。この結果が意味するものは、歯科界は良きにつけ悪きにつけ、システム及び技術も然ることながら医師同士のパーソナルコミュニケーションの有無により紹介が決まる部分が多いと言うことであろう。そのため、学術講演などを通し、積極的なパーソナルコミュニケーションの構築を行うことも重要と思われた。一方で、病診連携システムを早急に構築し、システム的に円滑で良いコミュニケーションが取れる組織を作ることにも急務と考えられた。

今回協力頂いた歯科医師は、全て九州歯科大学の同窓であることから、アンケートに寄せられた各種意見は、先輩、同輩及び後輩に対し発せられた飾りのない率直な内容であるとも考えられ、期待を込めた内容であることを理解しておくべきである。我々は、寄せられたアンケートの意見を真摯に受け止め、速やかな対応を行うことが必要で、意見に沿った形で我々が変わっていくこと

が出来れば、九州歯科大学附属病院が地域の基幹病院として重要な役割を十分に達成することに繋がる。そしてこれにより、福岡県民が九州歯科大学附属病院を地域貢献度の高い病院として評価してくれることにも繋がるであろう。それは単に、アンケート調査に御協力頂いた先生方への御恩返しであるばかりか、我々泉友会会員を含めた同窓生が望む九州歯科大学の生き残りに繋がって行くものと信じて疑わない。今回行った調査研究に加え、地域住民の要求をも含めた調査研究を行っていくことで、九州歯科大学独立法人化への青写真を作成する大基になることは疑いようがない。5年後、10年後に同様のアンケート調査を行い改善されているかの元データとして極めて有効な資料となりうる。

一方、今回行ったアンケート調査は、対象が九州歯科大学同窓生であったために、かなりバイアスのかかった調査であることは否めない。従って、地域医療に取り組んでおられる先生方の率直な意見を全て網羅しているとは言えないであろう。今後、我々は、歯科医師会などと共同で九州歯科大学出身者以外の声を聞くための研究デザインを組み立てて行く必要がある。そして、地域歯科医院と基幹歯科病院との関係を浮き彫りにするモデルスタディを我々が中心となって作成して行きたい。

今回の調査研究に快く御協力頂きました先生方ならびにアンケートの回収に御協力頂きました同窓会各支部の方々に感謝の意を表します。

本調査結果の一部につきましては、第64回九州歯科学会総会において発表しました。

ま と め

近隣施設の医療従事者が九州歯科大学附属病院に抱く希望や問題点を把握することを目的に、九州歯科大学出身で近隣医療施設に従事する歯科医師を対象にアンケート形式で調査を行い、次のような結果を得た。

1) 回収率は39.8%であった。歯科医院の規模は圧倒的に常勤歯科医師1名のところが多かった。

2) 一年間に歯科臨床に関する研修会に参加した方が89%と大半を占めていた。

3) 出席された研修会の内訳は、歯周治療に関するものが最も多く、補綴、訪問診療、口腔インプラントの順であった。

4) 九州歯科大学教員が講師をしたのは、全体の約半分であった。

5) 九州歯科大学附属病院の診療時間は72%に認知

されていた。要望としては、時間外の受入れを可能にしてほしいという意見が多数見られた

6) 附属病院の内容認知度は、X線 CT, MRI 装置の認知度は非常に高いものの、金属アレルギー検査、顎運動検査などは低かった。

7) 1年間に自院で対応困難な症例に遭遇した方は、128名中121名で、ほとんどの歯科医院にそのような症例が存在していた。

8) 対応困難な難症例を疾患別にみると口腔外科の疾患最も多く、顎関節症、歯科矯正治療、神経性疾患、口腔インプラント、有病高齢者の順であった。

9) 対応困難な症例を紹介する医療機関としては九州歯科大学附属病院が67%と最も多かった。

10) 難症例を紹介する医療機関の選択理由はほとんどの回答者が、“技術への信頼”と“先生と知り合い”という理由を挙げていた。

参考文献

- 1) 諸富孝彦, 菊池直樹, 野見山貴美子, 上野喜子, 永吉雅人, 尾川幸雄, 矢野淳也, 農蘇千絵, 北村知昭, 陳 克恭, 寺下正道: 九州歯科大学附属病院保存治療科を受診した初診患者の調査. — 2000年度～2002年度—. 九州歯会誌 58: 15-23, 2004.
- 2) 矢野淳也, 諸富孝彦, 北村知昭, 農蘇千絵, 三宅清美, 陳 克恭, 尾川幸雄, 永吉雅人, 寺下正道: 九州歯科大学附属病院保存治療科を受診した初診患者の調査. — 1997年度～1999年度—. 九州歯会誌 56: 129-136, 2002.
- 3) 北村知昭, 小川孝雄, 庄野庸雄, 陳 克恭, 井口由利, 木村健治郎, 農蘇千絵, 中山智子, 浜田晶子, 米田清之亮, 三宅清美, 寺下正道: 九州歯科大学附属病院第1保存部を受診した初診患者の調査. — 1994年度～1996年度—. 九州歯会誌 51: 707-715, 1997.
- 4) 岡田真人, 山田義裕, 大川由一, 高橋義一, 村居正雄, 宮武光吉, 石井拓男: 歯科医療機関と歯科医療費の地域差について. — 第2報 歯科大学設置の有無からの検討—. 日歯医療管理誌 38: 310-320, 2004.
- 5) 北村信隆, 宇佐美祐一, 本間 鑑, 石井拓男: 新潟市における地域歯科医療構造の変動要因に関する検討. 日歯医療管理誌 37: 440-448, 2003.
- 6) 岡田真人, 宮武光吉: 二次医療圏における歯科医療機関の分布. 日歯医療管理誌 31: 18-29, 1996.
- 7) 大川由一, 高橋義一, 岡田真人, 宮武光吉: 千葉県における歯科医師の地理的分布. 日歯医療管理誌 32: 244-251, 1998.
- 8) 平田幸夫, 木本一成, 荒川浩久, 飯塚喜一: 神奈川県内の歯科医師の分布状況について. 日歯医療管理誌 32: 252-257, 1998.
- 9) 加藤恭裕, 栗野秀慈, 嶋崎義浩, 邵 仁浩, 白川聡子, 藤田智恵, 瀧 朋子, 村田貴俊, 宮崎秀夫: 九州歯科大学附属病院における初診患者の最近9年間の動向について. 九州歯会誌 50: 374-379, 1996.
- 10) 花田啓輔, 曾我部浩一, 佐藤耕一, 立石 晃, 富永和宏, 福田仁一: 当科における1996年の新来患者の臨床統計学的観察. 九州歯会誌 51: 517, 1997.
- 11) 瀧口玲子, 大木 淳, 一田利通, 藤田邦彦, 佐藤通泰: 昭和57年度から昭和61年度の間に矯正治療相談で来院した新患の統計学的調査. 九州歯会誌 44: 674-684, 1990.
- 12) 内田朱美, 篠原雄二, 廣松辰巳, 永田芳子, 森本泰宏, 田中達朗, 大庭 健: 九州歯科大学附属病院歯科放射線科における過去10年間の画像検査件数の推移. 九州歯会誌 50: 819-826, 1996.
- 13) 守川雅男, 有田正博, 鱒見進一, 村上繁樹, 内田康也, 豊田静夫: 九州歯科大学附属病院補綴科来院患者の統計学的観察 (1979～1983年) 第1報 その概要について. 九州歯会誌 44: 349-352, 1990.